

■ 第 8 回委員会（平成26年8月26日）議論の整理

議事 1：委員会での議論から浮かび上がった検討テーマについて

論点「文化・芸術による、心の復興と想いの継承（仮）」の、メモリアルとしての位置付けと、誰が何をすべきか

◆文化・芸術の力について

柱立てについて賛成

- 新たに一つの取組みの柱とすることについて賛成
- ・是非今回のメモリアルのプロジェクトに据えてほしい

意義の再確認

- 震災において果たした役割
- ・人と人とのつながりの力を感じさせ励みになった
- ・地域、市民と音楽の距離が近くなった
- ・スポーツは人間の可能性の発露であり、時間をつないでくれる催事
- ・勇気を持って生きていくために不可欠な要素

メモリアルとしての視点

● 復興の原動力

- ・未来に向かってまい進していくための原動力になる
- ・復興から再生・創成として次にステップアップするために役立つ

● 鎮魂・祈りを込める

- ・鎮魂・祈りのシンボルとなる要素を取り入れることが大切

◆文化・芸術の力の具体的な活用方法

シンボルとなる拠点や取組みが必要

● 復興のシンボルとしての拠点

- ・センターとなる拠点をつくることにより、まちに波及効果を与える
- ・東北復興のシンボルとなるよう、アクセスの良い中心部に必要

● アートの国際展開

- ・新たな試みとして、官民協働でアートの定期国際展を開催することが有効ではないか

● 震災復興示すアイコン

- ・スポーツで表彰をつけるように、震災復興を抽象化したアイコンを催事等で活用してはどうか

地域への浸透

● 地域のなかでの展開

- ・地元の音楽関係者とも連携し音楽と市民との多様なつながりをつくることも大切

◆「文化」の言葉のとらえ方について

文化の捉え方を要検討

- ・芸術・文化のなかに「防災文化」が入っているが、扱い方を慎重にしてほしい（そぐわないのではないか）

◆3. 1 1の過ごし方

意義の再確認

- 忘れない、伝え続けるため必要
- ・日本全体に対して3. 1 1を忘れない、伝え続けるという意味で3. 1 1という日が必要

3. 1 1の日のあり方

- その後得られた知見などと比較しながら伝え続ける
- ・震災後得られた知見・体験などを3. 1 1時点と比較しながら、改善点も含め、振り返ることも必要

◆未来に向けてつなぐために必要な視点

フィクション

- 震災の違う表れ方も収集する
- ・被害に対する人々の想像力、その表現など、リアルなものの違う表れ方も収集する

- 様々な伝え方
- ・リアルなものを押し付けられると、拒否反応がどうしてもでてくる。
- ・フィクションとノンフィクション、アーカイブとアート、それぞれが活かし合うことも必要

東日本大震災をピークにしない

- アップデートの必要性
- ・この先起こり得る災害についても引き受けるという視点が大切
- ・展示の中身や情報をアップデートし、最新のものを示し続ける必要がある。

議事 2：東部地域の回遊性の実現について

論点「①回遊ルートへ、市民が繰り返し足を運ぶために必要なことは何か」「②回遊の仕組み実現のために、沿岸部の拠点に必要な機能は何か」「③現地での経験を、沿岸部の拠点でフィードバックする仕掛けは何か」

◆繰り返し足を運ぶために必要なこと

東部地域の回遊に必要な仕組み

地域との交流

- 地域の表情が見える関わり
- ・地域との関わり（体験談を聞く、地域のものを食す、過去の映像をみる など）をもつことで、本来のまちの顔がみえてくる
- ・東部地域の生業「農と食」をシンボルとした関わり方（体験・ツアー など）があると良い

- 地域に継続的に寄り添う関わり
- ・被災地域で暮らしや生業を再開すると決意した人たちがいる。その地域とともに農作物や居久根を育てるなど、訪問者も育ちあっていく仕組みがあれば良い。

多様な視点での伝え方

- 歩くことに楽しさがある仕組み
- ・東部地域の広さを考えると、歩き回ること自体に楽しさがある仕組み、季節ごとの楽しみが必要。（レンタサイクル、ジョギング、ノルディックウォーキングなど。）
- 環境の変化を伝える
- ・海岸線と県道のかさ上げ工事等により環境は変化するが、必要な事であれば、逆に活かし、市民とともに伝えていく方法を考えたい。

- 長い時間軸のなかで伝える
- ・人々が東部地域を訪れる理由には、400年前の伊達政宗公の時代からのことを知りたいという気持ちもある。震災前の長い歴史が存在する地域である。

沿岸部の拠点に必要な機能

- 更新されていく展示
- アップデートが必要
- ・継続的な訪問につなげるために展示内容のアップデートが必要
- 定期的に企画を仕掛ける必要性

被災前の暮らし

- 被災者自らが足を運べるように
- ・被災前の暮らしがわかる機能など、被災者自らが訪れることができる内容を考えることが大事
- ・現地で被災した人と言葉を交わすだけで、生々しいなにかを受け止めて帰ることにつながる

◆各地域での活用につなぐことが重要

経験者が、自分の住む地域に戻った後のこと

- 必要な視点
- 経験を自分の住む地域に活かす視点が大切
- ・防災・減災の取組み、人のつながりによって、二度と同じことは起こさないという表現を是非加えてほしい。

具体的な活用方法

- 経験の活かされ方を集める
- ・東部地域での経験が、どう他の地域につながったか（伝えられ方、活用のされ方など）知ることのできる展示も考えられる。

◆はじめて足を運ぶ人を増やすために

訪問のきっかけを仕掛ける

- 他地域の方々を招致
- ・災害リスクや関心の高い地域の方を招待しては、被災地訪問のニーズ有。事業の一つにしては。
- 中心部との連携
- ・中心部拠点でのシンポジウムと、沿岸部の現地視察の組合せの試みを積極的に行うのも良い。

◆回遊性の実現に必要なこと

人材育成

- ともに見つけ、語り伝える人
- ・東部地域を一緒に考え、語っていく人たちが必要

アクセス

- 東部地域への交通アクセス
- ・東西線を軸として、東部地域への交通アクセスをどうするか重要な課題
- ・避難道路も回遊性のなかでみれば、海側へ向かうアクセス道路となる

◆沿岸部拠点の活用に必要なソフト機能

アーカイブとの連携

- 調査研究結果のリストアップ
- ・震災後の、様々な分野での活動や調査結果などの目録が必要。
- 地域史のアーカイブ
- ・津波被災地域に関する地域史のアーカイブが必要。

◆中心部の拠点について

必要な取組み

- 早急に具体的な検討を
- ・既存施設の役割分担、予算など具体的なことを早く決めたほうが良い。
- 今からでもできることを
- ・語らなくなると風化する。今からでも既存施設等を活用し市民が語る場をつくっていきたい。